

日本語メール文における難易度要因の比較

—日本語学習者と日本語母語話者のアンケート調査から—

金 蘭美 (横浜国立大学)・金庭 久美子 (目白大学)・橋本 直幸 (福岡女子大学)
kim-ranmi-vp@ynu.ac.jp・k.kaneniwa@mejiro.ac.jp・hashimoto@fwu.ac.jp

【要約】

本研究では、メール文作成タスクにおいて、難易度をどのような要因に基づいて判断しているのかを明らかにする。そこで、日本語学習者と日本語母語話者を対象に、複数のメール文タスクから最も簡単・最も難しいと感じたものを選択させ、その理由を分析した。その結果、両者には差が見られ、日本語学習者は経験の有無や内容処理の負荷を重視する一方、日本語母語話者は読み手との関係性や読み手への負担を重視する傾向が示唆された。

1. はじめに

メール文作成は、日本語学習者に限らず、日本語母語話者にとっても容易な行為とは言えない。実際、大学教育の現場においても、日本人学生から送られてくるメール文の中には、本人が意図しない失礼な表現が含まれることもあり、メール文作成の難しさが母語話者にとっても存在することがうかがえる。日本語では、相手の立場や社会的関係性に応じた配慮を文面に反映させることが求められるが、こうした配慮を適切に行うことは、日本語母語話者にとっても判断が難しい場合がある。したがって、メール文の難しさは、単に語彙や文法といった言語形式の問題にとどまらず、対人関係や場面理解を含む多面的な側面を持つものと考えられる。さらに、同じメール文タスクであっても、その難しさの感じ方や判断の基準は、書き手の立場や経験によって異なる可能性がある。

一方、日本語教育におけるメール文指導は、ビジネスメールを中心とした形式的な指導に偏りがちであり、学習者が実社会で必要とされる多様なメール場面に十分に対応できていない可能性がある。実社会で使用されるメール文を適切に指導するためには、学習者がどのような観点からメール文の難しさを判断しているのかを把握することが不可欠である。

そこで本研究では、メール文作成タスクを通して、日本語学習者がメールのどのような点に難しさを感じているか、その要因を明らかにすることを目的とする。さらに、日本語母語話者との比較を通して、メール文の難易度判断に関わる要因を整理し、効果的な指導や支援に向けた示唆を得ることを目指す。

2. 先行研究

日本語学習におけるタスクの難易度に関しては、これまでも、学習者や教師による主観的評価、あるいは言語的特徴に基づく難易度判定など、さまざまな観点から研究が行われてきた。

まず、学習者による主観的な難易度評価に着目した研究として、尾沼・佐々木 (2024) が挙げられる。尾沼・佐々木 (2024) は、中上級の日本語学習者による多読学習材を対象に、主観的難易度評価と日本

語文章難易度判定システムによる自動判定結果との関係を分析し、多読開始時の選書レベルの提案を行っている。同研究では、学習者間で主観的難易度評価にばらつきが見られることが報告されているが、そのばらつきの理由については明確に言及されていない。

また、難易度判断における評価主体の違いに着目した研究として、谷・宮崎（2019）が挙げられる。谷・宮崎（2019）は、CEFR（Common European Framework of Reference for Languages）に基づく読解CDS（Can-Do Statements）を用いて、韓国人日本語学習者と韓国人日本語教師の難易度評価を比較し、レベル間で難しさの評価に差が生じることを明らかにした。特に、B2とC1の区別が困難である点や、語彙中心で抽象的な記述のCDSが評価のずれを引き起こす要因であることを指摘している。

一方、タスクの条件が言語遂行に与える影響に関しては、日本語学習者の発話を対象とした研究が行われている。桑（2025）は、対話者との力関係や社会的距離、要求の程度といったタスク条件を操作した発話課題を用い、流暢さ・複雑さ・正確さ・語彙の豊富さの観点からタスク負荷がL2日本語学習者の発話に与える影響を調査している。その結果、負荷大タスクでは、負荷小タスクに比べて、より流暢でより正確なL2発話となること、語彙の豊富さについては負荷の大きさによる違いはないこと、負荷大タスクでは、流暢さと複雑さ・語彙の豊富さとの間に負の相関がみられ、正確さとの間に正の相関が見られたと報告している。ただし、桑（2025）は、タスクに内在する負荷と産出との関係を分析の主眼としており、学習者自身がそれらの負荷をどのように認識し、どのような要因をタスクの難しさとして判断しているのかといった主観的評価を直接的に検討したものではない。また、依頼・断り・謝罪といった場面の違いが、学習者にとってどのような難しさとして捉えられるのかについても、詳細な分析は今後の課題として残されている。

さらに、書き言葉であるメール文を対象に、難易度設定の枠組みを提示した研究として、金・金庭・橋本（2025）が挙げられる。同研究は、メール文タスク100種類を対象に、難易度判断基準として、①宛先との関係性に基づく「読み手配慮の必要度」、②用件が読み手に与える心理的・物理的負担に基づく「負担度」、③文章量や構造の複雑さに基づく「複雑さ」の三つを提案し、メール文タスクにおける難易度を多面的に捉える試みを行っている。しかしながら、これらの基準が、学習者自身の難易度判断とどのように対応しているのか、また学習者がどのような要素を「難しさ」として捉えているのかについては、十分に明らかにされていない。

本研究では、日本語学習者および日本語母語話者を対象に、メール文作成タスクにおける難易度判断に関する自由記述データを分析し、学習者がどのような観点から「簡単／難しい」と判断しているのかを明らかにする。これにより、メール文タスクの難易度設定や指導において考慮すべき要因を整理し、より体系的な指導・支援に向けた教育的示唆を得ることを目的とする。

3. 調査協力者と調査方法

3.1 調査対象

調査協力者は、関東のY大学に在学中の日本語学習者32名（中国語母語学習者21名、韓国語母語学習者11名）、日本語母語話者32名（Y大学在学中の日本人学生11名および、Y大学とその他の大学の日本語教師21名）の計64名である。日本語学習者の日本語レベルは、SPOT（Simple Performance Oriented Test）90を受けてもらい、中級以上の人を対象としているが、これは日本語によるメール文タスクを読み、難易度の低いものから高いものまで12種類のメール文が書けることが調査の前提となるためである。なお、日本語学習者の身分は、学部生、交換留学生、大学院生である。日本の滞在歴は

短い者は3か月、長い者は5年以上となっている。

3.2 調査方法

本研究では事前に100種類のメール文タスクを作成し、それに対し、独自に作成した難易度判定基準に基づき、A1、A2、B1、B2、C1、C2の6段階の難易度判定を行っている¹。この難易度判定基準は、①「読み手配慮の必要度」、②「負担度」、③「複雑さ」の各項目につきそれぞれ6点満点で評価した後、項目の重要度を考慮し、①×3、②×2、③×1という重みづけを行い得点化した。難易度判定をした100種類のメール文タスクに対し、読み手や用件などに偏りがないように、難易度の6段階に対応するタスクを各2つずつ、合計36タスクを選定し、「すみれ」「いんこ」「つばき」「すずめ」「ぼたん」「つばめ」の6つのグループに分けた。表1は調査に用いたタスクおよびその例である。

表1 調査に用いたタスクおよびその例

グループ	タスクの概略	タスクの例
I	すみれ 1 日本語の先生に返信する (A1) 15 指導教員にお礼を言う (A2) 51 寮の管理人に苦情を言い、依頼する (B1) 62 面識のある大学教員に依頼する (B2) 77 小学校の担当者に返信する (C1) 86 会社の人事課の担当者に連絡する (C2)	今日大学を休みました。日本語クラスに加藤先生が心配してメールをくれました。明日も休むことを言ってください。(タスク1:A1)
	いんこ 7 日本語の先生に連絡する (A1) 23 サークルの先輩に報告し、お礼を言う (A2) 42 指導教員に謝罪・返信する (B1) 60 不特定の学生にお礼を言う (B2) 78 会社の人事課の担当者に返信する (C1) 99 国土交通省の担当者に依頼する (C2)	あなたは就職活動をしています。今日会社訪問をして、卒業生の先輩(清水さん)と話しました。また会社内を案内してもらいました。先輩にメールをして、会社訪問の感想、お礼を言ってください。また応募する予定であることも告げてください。(タスク23:A2)
II	つばき 8 日本語の先生に問い合わせる (A1) 36 (親しい)友人に返信する (A2) 54 面識のある大学職員に依頼する (B1) 61 小学校の担当者からの連絡に返信する (B2) 76 会社の人事課の担当者に問い合わせる (C1) 96 市立図書館の担当者に苦情を言う (C2)	あなたは留学生です。留学生課の村上さんにメールします。12月に日本語能力試験を受けるので、文法をもっと勉強したいと思っています。大学のホームページで、日本語学習のためのボランティア制度があるのを知りました。留学生課にメールでボランティアを紹介してもらうように頼んでください。(タスク54:B1)
	すずめ 12 チューターを旅行に誘う (A1) 19 (あまり親しくない)友人に返信する (A2) 49 面識のある授業の先生に依頼する (B1) 67 会社の人事課の担当者に返信する (B2) 84 指導教員に報告・相談する (C1) 94 企業の役員にお礼を言う (C2)	あなたはインターンシップに参加しました。その会社から会社説明会の案内が来ました。担当者の山下さんに参加することをメールで伝えてください。(タスク67:B2)
III	ぼたん 2 日本語の先生に返信する (A1) 22 チューターに依頼する (A2) 39 面識のある大学教員の問い合わせに返信する (B1) 70 面識のない授業の先生に依頼する (B2) 81 会社の人事課の担当者に謝罪・連絡する (C1) 95 市役所の担当者に依頼する (C2)	あなたはある会社で2日間のインターンシップをしました。その時に借りた会社の帽子を持って帰ってしまいました。お詫びを言って、すぐ返送することを担当者の内田さんにメールで伝えください。(タスク81:C1)
	つばめ 5 バイト先の先輩に承諾を得る (A1) 27 ホストファミリーにお礼を言う (A2) 56 アルバイト先の店長に報告・依頼する (B1) 72 会社の人事課の担当者に返信する (B2) 80 面識のない授業の先生に依頼する (C1) 92 面識のない他大学の教員に依頼する (C2)	所属しているボランティアサークルで、環境問題についての講演会をすることになりました。〇〇大学の佐藤先生とは面識がありませんが、佐藤先生はその分野の専門家であり、最近出版された著書は話題になっています。講演を依頼してください。(タスク80:C2)

¹ 100種類のタスクにおける難易度別タスクの数は以下の通りである。

難易度	A1	A2	B1	B2	C1	C2	計
タスクの数	12	25	22	15	10	16	100

各グループには難易度の異なる 6 つのメールタスクを置いている。なお、タスクに付いている番号は本調査で付与したタスク番号であり、() の中の (A1) ~ (C2) は、筆者らがタスク設計時に設定した難易度を表している。A1~C2 は調査協力者には知らせていない。上記の 6 つのグループに対し、さらに、Ⅰ「すみれ・いんこ」、Ⅱ「つばき・すずめ」、Ⅲ「ぼたん・つばめ」のように、6 つのグループを 1 セットにし、調査協力者にはメール文データ収集システム『かもめだより』²を使い、合計 12 種類のメール文をウェブ上で書いてもらった。時間制限は設けていないが、生成 AI の使用は許可せず、日本語学習者の場合は、加えて翻訳ソフト使用を禁止とした。ただし、辞書を引くことは可能とした。

メール文入力終了後は、入力したメール文タスクに対し、6 段階 (A1 (易) ~ C2 (難)) で難易度を評価してもらい、さらに、以下の設問を用いた自由記述形式のアンケートを実施した。今回は 1) 2) の記述を分析の対象としている。

- 1) 2 つのグループのうち、最も簡単だったタスクはどれですか (タスクの番号をご記入ください)。また、その理由は何ですか。
- 2) 2 つのグループのうち、最も難しかったタスクはどれですか (タスクの番号をご記入ください)。また、その理由は何ですか。
- 3) あなたが入力した 12 種類のメール文タスクの難易度を決める際に、何か基準はありましたか。できるだけ具体的に書いてください。

4. 調査結果

4.1 「最も簡単」「最も難しい」と判断されたタスク

調査協力者のアンケート結果を基に、難易度が最も簡単だと答えたタスクと最も難しいと答えたタスクの比較を行った。結果は、次頁の表 2 の通りである。各タスクで回答が半数以上を占めているものには網掛けで記している。なお、表 2 の L は日本語学習者を J は日本語母語話者表している。

表 2 を見ると、簡単だと判断したタスクは、両者とも 12 タスクのうち、4~5 種類に回答が集中する傾向がうかがえる。特に、日本語母語話者 (J) の場合、Ⅰグループのタスク 7 (日本語の先生に返信する : A1) や、Ⅱグループのタスク 36 (友人への返信 : A1) など、特定のタスクに意見が集約されており、判断の傾向が明確であった。一方、日本語学習者 (L) の選択には多少ばらつきが見られ、一部のタスクで日本語母語話者との差が顕著であった。例えば、Ⅱグループのタスク 36 (友人への返信 : A1) の場合、日本語母語話者は 11 名中 10 名の方が最も簡単なタスクとして選んでいるのに対し、日本語学習者は 11 名中 3 名と少なく、タスク 8 (日本語の先生に問い合わせる : A1) では、日本語学習者のほうが日本語母語話者より、選択する者が多かった。

一方、「最も難しい」と判断したタスクでは、日本語学習者・日本語母語話者ともに 5~7 種類のタスクが選ばれており、選択のばらつきが広がっている。この傾向は特に日本語学習者に顕著であり、Ⅱグループのタスク 94 (企業の役員にお礼を言う : C2) を除くと各グループで半数以上の方が選んでいるタスクは見られず、「最も難しい」と判断したタスクの種類が多岐にわたっている。以上から、日本語学習者と日本語母語話者の間では、難しさをどうとらえているか、その認識に差があると言える。次節では、「最も簡単」・「最も難しい」と判断した理由を分析し、両者の違いの原因を探る。

² 『かもめだより』は、筆者らが開発したメール文データ収集システムである。一般公開はしておらず、調査協力者にのみ個別で開示している。

表2 「最も簡単」だと判断したタスクと「最も難しい」と判断したタスクの内訳

グループ		最も簡単だと判断したタスク		最も難しいと判断したタスク			
		L	J	L	J		
I	すみれ	1 日本語の先生に返信する	2	1	15 指導教員にお礼を言う	1	1
		51 寮の管理人に苦情を言い、修理を依頼する	2	0	62 面識のある大学教員に依頼する	2	0
	いんこ	7 日本語の先生に遅刻することを連絡する	4	9	60 不特定の学生 (ML) にお礼を言う	4	0
		23 サークルの先輩に報告し、お礼を言う	2	2	78 会社の人事課の担当者に返信する	3	5
		42 指導教員に謝罪・返信する	1	0	99 国土交通省の担当者にインタビューを依頼する	1	4
	計 21 件	11	10	計 21 件	11	10	
II	つばき	8 日本語の先生に問い合わせる	6	1	76 会社の人事課の担当者に問い合わせる	1	1
		36 (親しい) 友人からのお礼のメールに返信する	3	10	96 市立図書館の担当者に苦情を言う	2	5
	すずめ	12 チューターを旅行に誘う	1	0	19 (あまり親しくない) 友人に返信する	1	1
		19 (あまり親しくない) 友人に返信する	1	0	67 会社の人事課の担当者に返信する	1	0
					84 指導教員に報告・相談する	0	2
	計 22 件	11	11	計 22 件	11	11	
III	ぼたん	2 日本語の先生の依頼を承諾する	1	1	81 会社の人事課の担当者に謝罪・連絡する	2	0
		22 チューターに依頼する	4	1	95 市役所の担当者にインタビューを依頼する	1	1
	つばめ	5 バイト先の先輩に承諾を得る	2	7	27 ホストファミリーにお礼を言う	1	1
		27 ホストファミリーにお礼を言う	3	2	56 アルバイト先の店長に報告・依頼する	2	1
					72 会社の人事課の担当者に返信する	1	1
	計 21 件	10	11	計 21 件	10	11	

4.2 「最も簡単」「最も難しい」と判断した理由の自由記述

調査協力者の自由記述をもとに「最も簡単」「最も難しい」と思った理由をカテゴリー別に分類し、比較を行った。カテゴリーについては、まず調査協力者の記述から、理由を述べている箇所を目視で抽出し、キーワード形式でまとめたのち、カテゴリー名をつける形で行った。また、理由が二つ以上の場合は、理由1、理由2、理由3のように別々に分類し、カテゴリーもそれに合わせて追加していった。以下の表3は調査協力者の記述文とカテゴリーの分類の例である。

表3 調査協力者の記述に基づくカテゴリー分類の例

調査協力者	「最も簡単」だと判断したタスクとその理由	理由1	理由2	カテゴリー1	カテゴリー2
JL001	task7: 電車の遅延で遅れるだけ伝えれば (ママ) いいですから楽だとおもいます。それに日本語の先生が一応知っている相手ですから過分にかしこまった言葉使いは要らないと思いますから。	内容が簡単	面識のある相手	内容に対する負荷	読み手との関係
JL014	task19: 類似の文章を書いたことがあります。	タスクと同様の経験がある		経験の有無	
JL030	task22: 私の事情を知っている人で頼みやすい人だったので文章の作成が簡単だった。	面識のある相手		読み手との関係	
JL031	task1: たくさんしてみたメール作成だったので書きやすかった。	タスクと同様の経験がある		経験の有無	
JNS004	task7: 伝えることが明確かつ単純であり、送る相手も知っている人であるため。	伝える内容が明確・単純	面識のある相手	内容に対する負荷	読み手との関係
JNS005	task36: 親しい友人に送信または返信するメール。難しい敬語等を使わず、自身の伝えたいことを簡潔に書くことができるから。	親しい友人	敬語不要	読み手との関係	言語的複雑さ・難しさ
JNS004	task99: 普段接点や関わりのある人物ではない上、相手に負担になるようなお願いであるため。	外の関係の相手	相手に負担になるお願い	読み手との関係	読み手への負担
JNS007	task7: 相手の顔が見える。不可抗力の状況について事実を伝えればよい。	面識のある相手	正当な理由がある	読み手との関係	責任の所在

理由のキーワードを抽出する際の根拠となった記述は太字にしている。なお、調査協力者列の JL と JNS はそれぞれ日本語学習者と日本語母語話者を表しており、数字は調査協力者の一連番号である。

このようにしてカテゴリー別に数を数えた結果、表 4、表 5 のようになった。表 4 は「最も簡単」だと判断した理由であり、表 5 は「最も難しい」と判断した理由である。なお、この項目に回答していない者（3 名）や、一部の回答に 2 つ以上のカテゴリーに属するものがあつたため、表中に示した延べ件数と、実際の調査協力者の人数は一致していない。

まず、表 4 では「最も簡単」だと思った理由を示す。読み手が親しい相手のため、面識があるためとする「①読み手との関係」によるもの、伝えるべき内容が簡単・単純、明確であるためとする「②内容処理の負荷」、メール文タスクと同様の経験があるためとする「③経験の有無」、敬語や難しい表現を必要としない、とする「④言語的難しさ・複雑さ」、伝える用件が自分に非がない、正当な理由があるためとする「⑤責任の所在」、読み手に対し不快感を与えたり印象を悪くしたりする可能性がないとする「⑥対人配慮の必要性」、読み手に時間的・物理的・精神的負担をかけることがないとする「⑦読み手への負担」の 7 つのカテゴリーが抽出できた。

この 7 つのカテゴリーにおける回答傾向について、JL と JNS（各 $n=32$ ）を対象に Fisher の正確確率検定（両側検定）を実施した。その結果、有意水準 5% において有意差が認められる項目はなかった。ただし、「③経験の有無」カテゴリーにおいて日本語学習者のほうが選択する割合が高い有意傾向が見られた（ $p = .083$, オッズ比 = 5.00）³。

表 4 「最も簡単」だと判断した理由（94 件）

カテゴリー	JL (44 件)	JNS (50)
①読み手との関係 (面識がある人、親しい人)	17 38.6%	20 40.0%
②内容処理の負荷 (簡単・明確・日常的なタスク)	13 29.5%	19 38.0%
③経験の有無 (同じ経験をしたことがある)	8 18.2%	2 4.0%
④言語的難しさ・複雑さ (敬語不要・構成が簡単)	6 13.6%	4 8.0%
⑤責任の所在 (自分に非がない・正当な理由がある)	0 0.0%	3 6.0%
⑥対人配慮の必要性 (不快感を与えたり印象を悪くしたりする可能性がない)	0 0.0%	1 2.0%
⑦読み手への負担 (時間的・物理的・心理的負担をかけない)	0 0.0%	1 2.0%

次に、表 5 に「最も難しい」と判断した理由を示す。「最も難しい」と判断した理由の場合も、「最も簡単」だと判断したタスクのカテゴリーと同様、「①読み手との関係」「②内容処理の負荷」「③経験の有無」「④言語的難しさ・複雑さ」「⑤責任の所在」「⑥対人配慮の必要性」「⑦読み手への負担」が抽出でき、加えて、書き手が個人ではなく組織の代表として発信する必要があるためとする「⑧立場」やビ

³ 一部の設問に未回答者（日本語母語話者のうち「最も簡単」で 2 名、「最も難しい」で 3 名）が含まれるが、本検定は各設問に対する有効回答の実数に基づき算出している。

ジネスマナーを意識する必要があるためとする「⑨ビジネスマナー」の9つのカテゴリーが抽出できた。なお、表5の項目は、日本語学習者の結果を基準に、件数が多い順に並べ替えている。

これら9つのカテゴリーにおける回答傾向について、JLとJNS(各n=32)を対象にFisherの正確確率検定(両側検定)を実施した。その結果、「⑦読み手への負担」において、JNSの割合がJLより有意に高いことが確認された($p = .026$, オッズ比 = 0.09)。一方、「②内容処理の負荷」については、JLのほうが選択する割合が高い有意傾向が見られた($p = .076$, オッズ比 = 2.79)。その他のカテゴリーについては、両群間に有意差は認められなかった。

表5 「最も難しい」と判断した理由(106件)

カテゴリー	JL (51件)	JNS (55件)
②内容処理の負荷 (伝える内容が不明確・複雑・状況がイメージしにくい)	19 37.3%	11 20.0%
③経験の有無 (タスクと同様の経験をしたことがない)	11 21.6%	6 10.9%
①読み手との関係 (上位者・面識がない人・外の関係の人)	7 13.7%	14 25.5%
⑥対人配慮の必要性 (失礼にならないか心配、丁寧さを意識、誤解を与えたくない、悪い印象や不快感を与えたくない)	7 13.7%	6 10.9%
④言語的難しさ・複雑さ (敬語が必要・語彙の選択・間違えたくない)	3 5.9%	4 7.3%
⑧立場 (個人ではなく組織の代表として発信)	2 3.9%	3 5.5%
⑦読み手への負担 (時間的、物理的、心理的負担をかける)	1 2.0%	8 14.5%
⑤責任の所在 (自分に非がある、正当な理由のない要求や依頼)	0 0.0%	2 3.6%
⑨ビジネスマナー (ビジネスマナーを意識)	1 2.0%	1 1.8%

5. 考察

5.1 「最も簡単」「最も難しい」と判断されたタスクの選択傾向

「最も簡単」および「最も難しい」と判断したタスクのいずれにおいても、日本語学習者と日本語母語話者の判断が一致しないタスクが確認された。ただし、「最も簡単」と判断したタスクについては、日本語母語話者では特定のタスクに意見が集約される傾向が見られ、判断の基準が比較的共有されていることがうかがえる。たとえば、「親しい友人からのお礼メールに返信する」(タスク36)や、「日本語の先生に返信する」(タスク7)のように、実社会において対人的・言語的負担が小さい場面は、日本語母語話者にとって容易に「簡単」と認識されやすいと考えられる。

- ・ タスク36: 仲のいい友だちの井上さんの卒業論文の短い資料を翻訳してあげました。お礼のメールが来たので返信をしてください。
- ・ タスク7: 電車の事故で電車が止まっています。日本語クラスの森田先生に授業に遅れることを連絡してください。

一方、日本語学習者では、「最も簡単」と判断されたタスクであっても選択が分かれており、日本語

母語話者ほど明確な共通認識は見られなかった。このことから、日本語学習者の難易度判断には、読み手との関係性そのものよりも、内容理解のしやすさや、タスクと同様のメール文作成経験の有無が強く影響している可能性が示唆される。

「最も難しい」と判断したタスクについては、日本語母語話者でも一定のばらつきが見られるものの、全体としては選択傾向に共通性が認められた。これに対し、日本語学習者では選択のばらつきがより大きく、日本語母語話者にはほとんど選ばれなかったタスクを「難しい」と判断する例も多く見られた。特に、「不特定多数の学生にお礼を述べる」（タスク 60）や、「企業の役員にお礼を言う」（タスク 94）といった、社会的責任や立場差を伴う場面は、日本語学習者にとって心理的・言語的負荷の高いタスクとして認識されていると考えられる。

- ・ タスク 60：あなたの国で大きな地震があり被害がでました。学生 ML で学生に募金を呼び掛けた結果、たくさんの募金が集まりました。お礼を言ってください。
- ・ タスク 94：あなたは大学の留学生会の会長をしています。先月、A 社の社長（森永さん）があなたの大学の留学生を対象に多額の寄付をしてくれました。今後、留学生向けの奨学金として使用される予定です。会を代表してお礼を伝えてください。

さらに、すべての調査協力者が同一のタスク群から選択しているにもかかわらず、日本語母語話者の方が「簡単なタスク」に関する判断が一致しやすいという結果は、タスク難易度の認知において、母語話者が共有する対人経験や言語運用の蓄積といった共通基盤の影響が大きいことを示していると考えられる。

5.2 「最も簡単」「最も難しい」と判断されたタスクを選択した理由

前節では、「最も簡単」「最も難しい」と判断されたタスクの選択傾向について、日本語学習者と日本語母語話者の間に違いが見られることを示した。本節では、これらの選択傾向の違いがどのような理由に基づいて生じているのかを明らかにするため、自由記述に基づく理由カテゴリーの分析結果をもとに考察を行う。

前述したとおり、本調査では、日本語学習者および日本語母語話者を対象に、メール文を実際に執筆してもらったうえで難易度を判断してもらっている。その結果をもとに、両者が「最も簡単」「最も難しい」と感じた理由を分析したところ、書き手による難易度の判断は、一般に想定されがちな言語的複雑さや表現の難しさだけでなく、読み手との関係性、タスク内容の明確さ、書き手自身の経験の有無といった要因に強く依存していることが示された。

まず、「最も簡単」だと判断されたタスクに関しては、「③経験の有無」カテゴリーにおいて、日本語学習者と日本語母語話者の間に有意傾向が確認された。日本語学習者は、自身の実体験の有無を基準に難易度を判断しており、過去の経験に照らして言語的に具体化しやすいタスクを「簡単」だと判断する傾向が見られた。一方、日本語母語話者ではこのような傾向はあまり見られず、経験そのものよりも、状況全体を踏まえた判断が行われている可能性がある。また、「⑤責任の所在（自分に非がない・正当な理由がある）」カテゴリーは、日本語母語話者の回答にのみ見られ、日本語学習者には確認されなかった。回答数自体は多くないものの、この結果は、日本語母語話者がタスクの難易度を判断する際、自責の有無や正当性といった社会的・心理的要素を考慮している可能性を示している。

次に、「最も難しい」と判断されたタスクについて見ると、日本語学習者と日本語母語話者の間で、

理由カテゴリーの分布に明確な違いが認められた。日本語学習者は、「②内容処理の負荷（伝える内容が不明確・複雑・状況がイメージしにくい）」を理由として挙げる傾向があり、情報の整理や必要な表現の選択そのものに不安を感じることが、難しさの判断につながっていると考えられる。一方、日本語母語話者では、「①読み手との関係」「②内容処理の負荷」「⑦読み手への負担」といったカテゴリーに属する回答が全体の半数以上を占めている。特に、「⑦読み手への負担」は、日本語学習者との間で有意差が認められ、日本語母語話者の特徴であると言える。これは、日本語母語話者がメール文作成時に、伝える内容だけでなく、読み手との関係性や、読み手側にどのような影響や負担を与えるかといった点を考慮しながら表現を選択していることを反映していると考えられる。すなわち、日本語母語話者にとって、タスクを「難しい」と判断する背景には、内容の複雑さに加えて、「どのように伝えるか」といった対人配慮や、読み手との関係・立場を踏まえた判断が深く関与している可能性がある。

以上の結果から、日本語学習者は、言語的・心理的な安心感につながる「③経験の有無」や、タスク内容を言語的に再現しやすいかどうかといった「②内容処理の負荷」を中心に難しさを判断している傾向が見られた。一方、日本語母語話者は、伝える内容そのものだけでなく、どのように伝えるかにも注意を向け、読み手との関係性や読み手への負担といった観点から難易度を判断している可能性がある。これらの結果は、メール文タスクにおける難易度の判断が、単に言語的複雑さや表現の難しさにとどまらず、読み手との社会的関係性や文化的背景を踏まえた判断と関連している可能性があることを示唆している。

5.3 メール文タスクにおける難易度要因の比較

本節では、本調査の結果を従来の指標と比較し、本研究によって明らかになった難易度判断の特徴を整理する。まず、従来の指標との関係について、日本語学習者が難しさの主因とした「内容処理の負荷」は、CEFR (Council of Europe, 2001) や JF 日本語教育スタンダード (2017) がレベル基準とする情報の具体性や構成の複雑さ、言語産出の負荷といった観点とおおむね一致している。つまり、日本語学習者の難易度判断は、既存の参照枠が示す産出能力の段階的指標に準拠したものである。

しかし、本調査の結果、日本語母語話者が「読み手との関係」や「読み手への負担」を難しさの主因としているのに対し、日本語学習者はそれらの要因を難しさの判断材料とする割合が低かった。日本語学習者も「言語的難しさ・複雑さ」のカテゴリーにおいて敬語の必要性について言及しており、対人関係を全く意識していないわけではない。しかし、その関心は正しい形式（敬語）の選択という自身の産出負荷に留まっている。一方で日本語母語話者は、言語形式の正確さ以上に、そのメールが読み手に与える心理的・実務的影響、すなわち Brown & Levinson (1987) によるポライトネス理論が示す「負担の大きさ (R)」を難易度の核心として捉えていると言える⁴。

6. 日本語教育への示唆と今後の課題

以上の結果から、メール文タスクにおける難易度のとらえ方には、日本語学習者と日本語母語話者の間に一定の差が見られることが示唆された。日本語母語話者が難しいとは感じないタスクであって

⁴ Brown & Levinson (1987/2011) は、相手の「顔 (フェイス)」を脅かす行為 (Face Threatening Acts) の重さを決定する社会的変数として、相対的な権力 (Power: P)、社会的距離 (Distance: D)、当該行為の負担の大きさ (Ranking of imposition: R) の3つを挙げている。

も、日本語学習者は難しさを感じることもあり、特に読み手への負担が想定されるタスクについては、指導上する際、より注意が必要であることが明らかになった。

本研究では、難易度の判断基準として日本語学習者は「内容処理の負荷」を挙げていた。日本語能力が十分ではない日本語学習者の場合、母語での経験があったとしても、読み手を意識すると、何をどのように書くのかという処理が十分にできない可能性がある。したがって、指導においては、言語形式の指導にとどまらず、読み手との関係性や負担を踏まえた表現選択についても明示的に扱う必要があるだろう。また、本研究の結果を踏まえ、タスク間の難易度に過度なばらつきが生じないように調整を行い、メール文作成を効果的に練習できる支援システムの構築が求められる。とりわけ、難易度が高いと判断されやすいタスクに対しては、段階的な学習支援やフィードバックを通じて、学習者の心理的負担を軽減し、自信を持って表現できる学習環境を整備することが今後の課題である。

なお、学習者の日本滞在歴や日本語レベル（中級・上級）の違い、実際に産出されたメール文の質との関連については、本研究では十分に検討できておらず、今後の課題としたい。

付記

本研究は日本学術振興会科学研究費助成事業（基盤研究 C：課題番号 24K03977）の助成を受けて行ったものである。

参考文献

- 尾沼玄也・佐々木良造（2024）「中・上級学習者による多読学習材の主観的難易度評価と日本語文章難易度判定システムの結果の比較—最初の1冊を選ぶために—」『日本語プロフィシエンシー研究』(12), 91-99.
- Council of Europe（2001）, 吉島 茂・大橋 理枝（訳・編）（2008）『外国語教育Ⅱ—外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠—』日本語版初版第2刷, 吉島茂・大橋理枝（訳・編）（2008）, 朝日出版社
- 金蘭美・金庭久美子・橋本直幸（2025）「メール文のための難易度判定基準設定の試み—100種類のメール文タスク作成を通して—」『日本語教育方法研究会誌』31-2, 122-123.
- 国際交流基金（2017）『JF 日本語教育スタンダード【新版】—利用者のためのガイドブック—』
https://www.jfstandard.jpf.go.jp/pdf/web_whole.pdf（2026年1月24日）
- 桑田（2025）「タスク負荷がL2日本語学習者の発話に与える影響—流暢さ・複雑さ・正確さ・語彙の豊富さの観点から—」『言語科学研究：神田外語大学大学院紀要』(31), 59-77.
- 谷誠司・宮崎佳典（2019）「韓国人日本語学習者による自己評価と韓国人日本語教師による難易度評価の調査結果比較：CEFR 読解 Can-Do Statements を対象に」『常葉大学外国語学部紀要』(35), 45-57.
- ブラウン, ペネロピ・レヴィンソン, スティーヴン C. (1987), 田中典子（監訳）, 斉藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野壽憲・山下早代子（訳）（2011）『ポライトネス—言語使用における、ある普遍現象』研究社